

横查情報月報



2022
5055

12月
15日

横浜市衛生研究所

令和4年12月号 目次

【検査結果】

横浜市内のマダニ類調査結果（令和3年度）	1
農産物の残留農薬検査結果（令和4年8月～10月）	4

【情報提供】

衛生研究所WEBページ情報（令和4年11月）	8
------------------------------	---

【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査報告*（令和4年11月）	10
-----------------------------	----

* この記事では主に、医療機関向けの情報を提供しています。

感染症発生動向調査は感染症法に基づく国の事業です。本事業に関する詳細は、「感染症発生動向調査とは」（下記URL）をご参照ください。

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kenko-iryo/eiken/kansen-center/doko/systemgaiyo.html>

横浜市内のマダニ類調査結果（令和3年度）

1 はじめに

マダニ類は日本に約50種が生息しており、すべての種が吸血し、主に哺乳類や鳥類、爬虫類などに寄生します。ダニ媒介感染症は、病原体を保有するダニが吸血の際に病原体を媒介することによって起こる感染症のことです。マダニ類による吸血は、幼虫、若虫、成虫の各ステージで1回ずつ、生涯で3回行われ（図1）、いずれも病原体を媒介するリスクがあります。

ヒトの主なダニ媒介感染症は、急性重症熱性血小板減少症候群（severe fever with thrombocytopenia syndrome; SFTS*¹）、ウイルス脳炎、日本紅斑熱、ライム病などが挙げられ、特に近年ではSFTSが問題となっています。

SFTSは、日本国内では2013年（平成25年）1月に、海外渡航歴のない方が罹患し、2012年（平成24年）秋に死亡していたことが初めて報告されました。それ以降、SFTS患者が確認されるようになり、2022年（令和4年）7月31日現在で、累計患者数763名（うち死亡例92例）が報告されています*²。SFTSの推定感染地は西日本が中心でしたが、徐々に患者発生が確認される地域が東へ広がっています。また、患者発生報告のない地域に生息するマダニ類からもSFTSウイルス遺伝子が検出されたという報告もみられています。

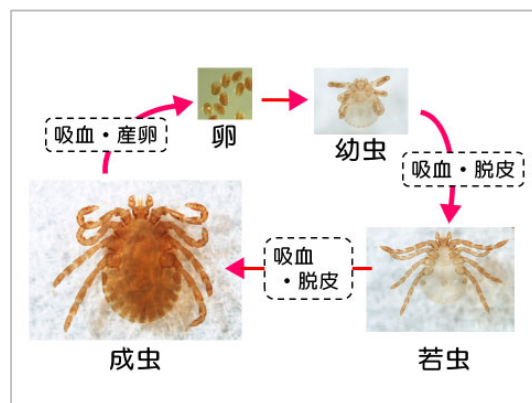


図1 マダニ類の生活史

横浜市でもマダニ類の捕獲、種の鑑別を行い、市内に生息するマダニ相を把握するとともに、ウイルス検査が行える体制を整えておくことが必要です。そのため、市内の緑地や公園において、マダニ類の生息状況調査を行い、捕獲したマダニ類のSFTSウイルス遺伝子検査を行っています。

本稿では、令和3年度に実施した調査結果について報告します。なお、この調査の一部は衛生研究所課題持込型研修により行われました。

2 調査方法

(1) マダニ類の採集

マダニ類の採集は、旗ずり法（フラッグング法）により行いました。旗ずり法とは、白色フランネル布（30×45cm）を長さ約1メートルの棒の一端に付け、地表の植生や落ち葉の上をこすり、マダニ類を採集する方法です（写真1）。調査者一人当たり約30分間調査を行いました。

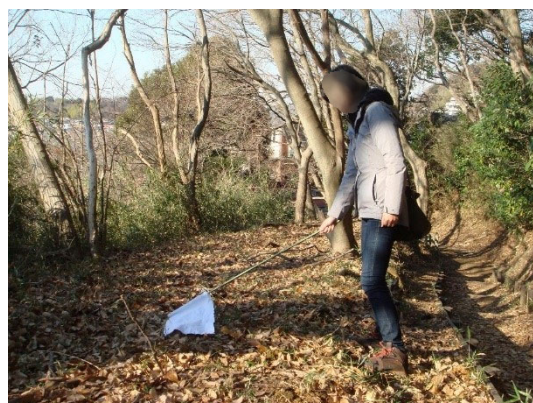


写真1 旗ずり法（フラッグング法）

令和3年度は、栄区瀬上市民の森（円海山；以下円海山と略す）及び金沢区富岡総合公園の2地点で調査を行いました。調査は、円海山では2021年10、11、12月の各月1回計3回、富岡総合公園は9、11、12月の各月1回計3回行いました。

採集したマダニ類は、成虫、及び若虫については凍結殺虫し、幼虫はアルコールに浸漬しました。成虫については実体顕微鏡で、若虫及び幼虫については光学顕微鏡で同定しました。

(2) SFTSウイルス遺伝子検査

採集したマダニ類の成虫及び若虫の一部について、同定、計数後にSFTSウイルス遺伝子検査*3を行いました。

3 結果

(1) マダニ類の採集

調査地点別のマダニ類の捕獲数を表に示しました。

表 調査地点別のマダニ類捕獲数

調査地点	調査のべ人数	キチマダニ	チマダニ属の一種	アカコッコマダニ	合計
金沢 富岡総合公園	4	2 (100%)	0	0	2
栄 瀬上市民の森(円海山)	18	309 (99.0%)	1 (0.3%)	2 (0.6%)	312
合計		311 (99.0%)	1 (0.3%)	2 (0.6%)	314

令和3年度の調査では、キチマダニ *Haemaphysalis flava*、チマダニ属の一種及びアカコッコマダニ *Ixodes turdus* の3種314個体のマダニ類が採集されました。調査地点別では、円海山が312個体(99.3%)、富岡総合公園が2個体(0.7%)、でした。

円海山では、10、11、12月に調査を行い、キチマダニ、チマダニ属の一種及びアカコッコマダニの3種が採集されました。キチマダニが99.0%を占めました。

円海山におけるキチマダニのステージ別捕獲状況について、3回の調査結果を図2に示しました。



写真2 キチマダニ成虫

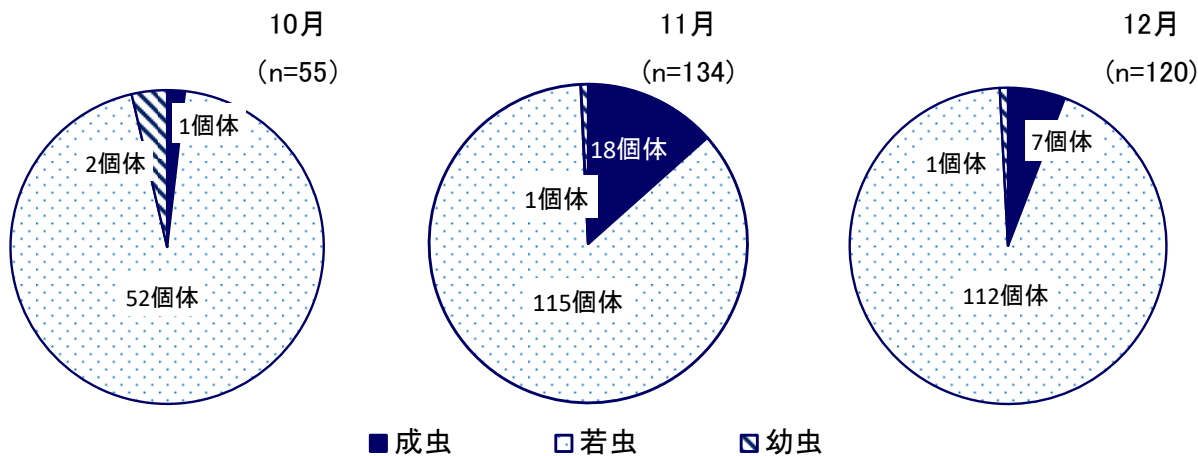


図2 円海山におけるキチマダニのステージ別捕獲状況

成虫はいずれの回も捕獲されましたが、捕獲数はそれぞれ1個体、18個体、7個体と少数でした。
若虫はいずれの採集回でも多くの個体が捕獲されました。若虫が占める割合は、10月が94.5%、11月85.8%、12月 93.3%でした。幼虫はごく少数の捕獲個体数にとどまりました。
富岡総合公園では、12月にキチマダニの若虫が2個体捕獲されました。
なおSFTSの主要媒介種といわれているフタトゲチマダニは捕獲されませんでした。

(2) SFTSウイルス遺伝子検査

円海山と富岡総合公園で捕獲されたマダニ類の若虫及び成虫の一部について、SFTSウイルス遺伝子検査^{*3}を行いました。

円海山については、捕獲されたキチマダニ成虫26個体及びアカコッコマダニ若虫1個体の検査を行いました。また富岡総合公園については、キチマダニ若虫2個体の検査を行いました。

いずれの検体からもSFTSウイルス遺伝子は検出されませんでした。

今後も市内におけるマダニ類の調査を実施し、生息状況やウイルス保有の有無について監視を継続していきます。

*1: SFTSは、2018年の国際ウイルス分類委員会(ICVT)の新規分類で、フェニユイウイルス科(Family Phenuiviridae)バンヤンウイルス属(Genus Banyangvirus)に分類されるフアイヤンシャン・バンヤンウイルス(Huaiyangshan banyangvirus)に科名、属名、ウイルス名が変更された。ただし、本稿では、広く一般に用いられている病名およびウイルス名である、SFTS及びSFTSウイルスを用いた。

*2: 遡り調査の結果判明した2005年(平成17年)からの患者4人は、感染症発生動向調査で届出が求められる以前に診断されたため含まれていない。

*3: 国立感染症研究所獣医科学部SOP「マダニからのSFTSウイルス検出マニュアル(ver3.1)」による。

【 微生物検査研究課 医動物担当 】

農産物の残留農薬検査結果（令和4年8月～10月）

食品中に残留する農薬等が、人の健康に害を及ぼすことのないよう、厚生労働省は農薬等について残留基準を設定しています。当所では、横浜市内に流通する農産物等に残留する農薬の検査を行っています。

今回は、令和4年8月～10月に各区福祉保健センター及び健康福祉局食品専門監視班が収去した市内産農産物の検査結果を報告します。

8月には、日本なし8検体及びぶどう2検体の計10検体について検査を行いました。10月には、かんしょ7検体、なす5検体、こまつな4検体、ばれいしょ3検体、きゅうり、玄米、さといも及びとうがん各2検体、だいこんの根1検体の計28検体について検査を行い、8月～10月で総計38検体でした。

検査の結果を表1に示しました。日本なし8検体、こまつな及びぶどう各2検体、きゅうり及びなす各1検体から延べ41項目の農薬が検出されました。このうち、こまつな1検体から、テブコナゾールが0.18ppm検出され、一律基準¹⁾である0.01ppmを超過していました。その他のものは、残留農薬の規格基準値を超えるものではありませんでした。

テブコナゾールはこまつなへの使用は認められていないため、誤使用や噴霧器への混入、近隣の農産物に使用したものが飛散して付着した等の可能性が考えられます。

検査項目及び検出限界については表2に示しました。

表1 市内産農産物の残留農薬検査結果

（令和4年8月～10月）

農産物	検査 検体数	農薬検出 検体数	検出農薬名	検出値 (ppm)	基準値 (ppm)
かんしょ	7	0			
きゅうり	2	1	クロルフェナピル	0.02	0.5
玄米	2	0			
こまつな	4	2	クロチアニジン	0.01	10
			クロルフェナピル	0.01	5
			テブコナゾール	0.18	0.01
					(一律基準)
			シペルメトリン	0.07	6
			テフルトリン	0.02	0.5
			メタラキシル及びメフェノキサム	0.03	1
さといも	2	0			
だいこんの根	1	0			
とうがん	2	0			
なす	5	1	アゾキシストロビン	0.01	3
ばれいしょ	3	0			
ぶどう	2	2	クレソキシムメチル	0.02	15
			クロチアニジン	0.01	5
			テブコナゾール	0.05	10
			ファモキサドン	0.17	2
			イミダクロプリド	0.20	3
			クロチアニジン	0.09	5
			テブコナゾール	0.24	10
			ペルメトリン	0.02	8

表1(続き) 市内産農産物の残留農薬検査結果

農産物	検査 検体数	農薬検出 検体数	検出農薬名	検出値 (ppm)	基準値 (ppm)
日本なし	8	8	クレソキシムメチル	0.08	5
			クロチアニジン	0.01	1
			ボスカリド	0.04	3
			クレソキシムメチル	0.15	5
			クロルフェナピル	0.01	1
			ブプロフェジン	0.01	6
			ヘキサコナゾール	0.02	0.3
			チアクロプリド	0.02	2
			ビフェントリン	0.02	0.5
			フェンブコナゾール	0.02	0.7
			ボスカリド	0.06	3
			アセタミプリド	0.01	2
			クレソキシムメチル	0.02	5
			チアメトキサム	0.01	1
			フェンプロパトリン	0.03	5
			ペルメトリン	0.06	2
			クロチアニジン	0.02	1
			フェンプロパトリン	0.25	5
			ボスカリド	0.05	3
			クレソキシムメチル	0.06	5
			アセタミプリド	0.01	2
			クレソキシムメチル	0.07	5
			クロチアニジン	0.01	1
			チアメトキサム	0.03	1
			ヘキサコナゾール	0.04	0.3
合計	38	14			

注) 中括弧()はそれぞれ同一検体からの検出、下線があるものは基準値を超えて検出されたもの

表2 農薬の検査項目及び検出限界

農薬名	検出 限界 (ppm)	農産物							農薬名	検出 限界 (ppm)	農産物						
		A	B	C	D	E	F	G			A	B	C	D	E	F	G
BHC(α、β、γ及びδの和)	0.005	○	—	—	—	○	○	○	オキサミル	0.01	○	○	○	○	○	○	○
DDT(DDE、DDD、DDTの和)*	0.005	○	○	○	○	○	○	○	カルバリル	0.01	○	○	○	○	○	○	○
EPN	0.01	○	○	○	○	○	○	○	カルプロバミド	0.01	○	○	○	○	○	○	○
アクリナトリン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	クミルロン	0.01	○	○	○	○	○	○	○
アセタミプリド	0.01	○	○	○	○	○	○	○	クレソキシムメチル	0.01	○	○	○	○	○	○	○
アゾキシストロピン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	クロチアニジン	0.01	○	○	○	○	○	○	○
アラクロール	0.01	○	○	○	—	○	○	○	クロマフェノジド	0.01	○	○	○	○	○	○	—
アルドリン及びディルドリン	0.005	○	—	○	—	○	○	○	クロルピリホス	0.01	○	○	○	○	○	○	○
イソキサチオン	0.01	—	○	○	○	○	○	—	クロルピリホスメチル	0.01	○	○	○	○	○	○	○
イミダクロプリド	0.01	○	○	○	○	○	○	○	クロルフェナピル	0.01	○	○	○	○	○	○	○
インドキサカルブ	0.01	○	○	○	○	○	○	○	クロルプロファミ	0.01	○	○	○	○	○	○	○
エトキサゾール	0.01	○	○	○	○	○	○	○	クロロクスロン	0.01	○	○	○	○	○	○	○
エトフェンプロックス	0.01	○	○	○	○	○	○	○	シアゾファミド	0.01	○	○	○	○	○	○	○
エポキシコナゾール	0.01	○	○	○	○	○	○	○	シアノフェンホス	0.01	○	○	○	○	○	○	○
エンドスルファン(α及びβの和)	0.005	○	○	○	○	○	○	○	シアノホス	0.01	○	○	○	○	○	○	○
エンドリン	0.005	○	○	○	○	○	○	○	ジエトフェンカルブ	0.01	○	○	○	○	○	○	○

表2(続き) 農薬の検査項目及び検出限界

農薬名	検出 限界 (ppm)	農産物							農薬名	検出 限界 (ppm)	農産物						
		A	B	C	D	E	F	G			A	B	C	D	E	F	G
ジコホール	0.01	○	○	○	○	○	○	○	フェンスルホチオン	0.01	○	○	○	○	○	○	○
シハロトリン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	フェントエート	0.01	○	○	○	○	○	○	○
ジフェノコナゾール	0.01	○	○	○	○	—	○	○	フェンバレーレート	0.01	○	○	○	○	○	○	○
シフルトリン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	フェンピロキシメート	0.01	○	○	○	○	○	○	○
シフルフェナミド	0.01	○	○	○	○	—	○	○	フェンブコナゾール	0.01	○	○	○	○	○	○	○
シプロコナゾール	0.01	○	○	○	○	○	○	○	フェンプロパトリン	0.01	○	○	○	○	○	○	○
シペルメトリン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	フサライド	0.01	○	○	○	○	○	○	○
ジメエート	0.01	○	○	○	○	○	○	○	ブタフェナシル	0.01	○	○	○	○	○	○	○
ジメモルフ	0.01	○	○	○	○	○	○	○	ブプロフェジン	0.01	○	○	○	○	○	○	○
シラフルオフェン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	フルジオキシニル	0.01	○	○	○	○	○	○	○
ダイアジノン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	フルシトリネート	0.01	○	○	○	○	○	○	○
ダイムロン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	フルトラニル	0.01	○	○	○	○	○	○	○
チアクロプリド	0.01	○	○	○	○	○	○	○	フルバリネート	0.01	○	○	○	○	○	○	○
チアメキシサム	0.01	○	—	○	○	○	○	○	フルフェノクスロン	0.01	○	○	○	○	○	○	○
テトラコナゾール	0.01	○	○	○	○	○	○	○	フルリドン	0.01	○	○	○	○	○	○	○
テブコナゾール	0.01	○	○	○	○	○	○	○	プロシミドン	0.01	○	○	○	○	○	○	○
テブフェノジド	0.01	○	○	○	○	○	○	○	プロチオホス	0.01	○	○	○	○	○	○	○
テブフェンピラド	0.01	○	○	○	○	○	○	○	プロパホス	0.01	○	○	○	○	○	○	○
テフルトリン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	プロピコナゾール	0.01	○	○	○	○	○	○	○
トリアゾホス	0.01	○	○	○	○	○	○	○	プロピザミド	0.01	○	○	○	○	○	○	○
トリコナゾール	0.01	○	○	—	○	○	—	—	ブromoプロピレート	0.01	○	○	○	○	○	○	○
トリフルラリン	0.01	○	—	—	—	○	○	○	ヘキサコナゾール	0.01	○	○	○	○	○	○	○
トリフロキシストロビン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	ヘプタクロル(エポキシを含む)	0.005	○	—	—	—	○	○	—
トルクロホスメチル	0.01	○	○	○	○	○	○	○	ペルメトリン	0.01	○	○	○	○	○	○	○
トルフェンピラド	0.01	○	○	○	○	○	○	—	ペンコナゾール	0.01	○	○	○	○	○	○	○
ノバルロン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	ペンシクロン	0.01	○	○	○	○	○	○	○
パラチオン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	ベンゾフェナップ	0.01	○	○	○	○	○	○	○
パラチオンメチル	0.01	○	○	○	○	○	○	○	ベンダイオカルブ	0.01	○	○	○	○	○	○	○
ビフェントリン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	ボスカリド	0.01	○	○	—	—	—	○	—
ピリダベン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	ホスチアゼート	0.01	○	○	○	○	○	○	○
ピリプロキシフェン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	マラチオン	0.01	○	○	○	○	○	○	○
ピリミカーブ	0.01	○	○	○	○	○	○	○	マイクロブタニル	0.01	○	○	○	○	○	○	○
ピリミノバックメチル	0.01	○	○	○	○	○	○	○	メタラキシル及びメフェニキサム	0.01	○	○	○	○	○	○	○
ピリミホスメチル	0.01	○	○	○	○	○	○	○	メチダチオン	0.01	○	○	○	○	○	○	○
ファモキサドン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	メキシフェノジド	0.01	○	○	○	○	○	○	○
フィプロニル	0.002	○	○	○	○	○	○	—	メトラクロール	0.01	○	○	○	○	○	○	○
フェナリモル	0.01	○	○	○	○	○	○	○	リニューロン	0.01	○	○	○	○	○	○	○
フェニトロチオン	0.01	○	○	○	○	○	○	○	リンデン(γ-BHC)	0.005	○	○	○	—	○	○	○
フェノブカルブ	0.01	○	○	○	○	○	○	○	ルフェヌロン	0.01	○	○	○	○	○	—	—
フェンクロルホス	0.01	○	○	○	○	○	○	○	レナシル	0.01	○	○	○	○	○	○	○

農産物の種類 A:こまつな、B:とうがん、なす、 C:きゅうり、D:だいこんの根、E:かんしょ、さといも、ばれいしょ、
F:日本なし、ぶどう、G:玄米

○:実施、—:実施せず

*DDTは p,p' -DDE、 p,p' -DDD、 o,p' -DDT及び p,p' -DDTの和

【農薬解説】

テブコナゾール

『オンリーワン[®]』、『シルバキュア[®]』等の商品名で販売されているトリアゾール系殺菌剤で、根、葉、種子などを經由して植物全体に均等に分布し病害に対して安定した効果を発揮します。小麦、大麦、果樹、ねぎ、たまねぎ、大豆等の農産物に適用があり、病害防除に使用されていますが、こまつなに適用はありません。

テブコナゾールの許容一日摂取量(ADI)²⁾は0.029mg/kg/日で、体重50kgの人が今回検出されたこまつなを一生毎日8.06kg食べ続けても、健康への悪影響はありません。

・オンリーワン[®]及びシルバキュア[®]は、バイエル クロップサイエンス株式会社の登録商標です。

※参考文献

・社団法人日本植物防疫協会、農薬ハンドブック2021年版

【用語解説】

1) 一律基準: 食品衛生法では、残留農薬等の残留基準値が定められている時はそれに従いますが、残留基準値が定められていない場合は、厚生労働大臣が定めた「人の健康を損なうおそれのない量」を用いて規制しています。この「人の健康を損なうおそれのない量」というのがいわゆる「一律基準」で、現在0.01ppmと定められています。

2) 許容一日摂取量(ADI:Acceptable Daily Intake) : ある物質について、人が生涯その物質を毎日摂取し続けたとしても、健康への悪影響がないと推定される1日当たりの摂取量のことです。体重1kg当たりの量で示されます(mg/kg体重/日)。

【 理化学検査研究課 微量汚染物担当 】

衛生研究所WEBページ情報（令和4年11月）

横浜市衛生研究所ホームページ（衛生研究所WEBページ）は平成10年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報、薬事情報を提供しています。

今回は、当WEBページにおける令和4年11月のアクセス件数、アクセス順位、追加・更新記事について報告します。

1 利用状況

(1) アクセス件数

令和4年11月の総アクセス数は、242,908件でした。前月に比べ1.1%増加しました。主な内訳は、横浜市感染症情報センター*83.9%、保健情報9.9%、薬事1.7%、検査情報月報1.5%、食品衛生1.3%、生活環境衛生0.9%でした。

* 横浜市では、衛生研究所感染症・疫学情報課内に横浜市感染症情報センターを設置しており、横浜市内における患者情報及び病原体情報を収集・分析し、これらを速やかに提供・公開しています。

(2) アクセス順位

表1 令和4年11月 アクセス順位

順位	前月比	タイトル	件数
1	→	EBウイルスと伝染性単核症について	14,699
2	→	ぎょう虫(蟯虫)症について	12,813
3	→	水痘(水疱瘡)・带状疱疹について	12,357
4	→	トキソプラズマ症について	8,935
5	↑	クロストリジウム-ディフィシル感染症について	8,369
6	↓	B群レンサ球菌(GBS)感染症について	8,294
7	→	サイトメガロウイルス感染症について	6,849
8	↑	手足口病について	6,185
9	↓	粉ミルク(乳児用調整粉乳)を70℃以上のお湯で溶かすワケを知っていますか?	6,092
10	↑↑	淋菌感染症(淋病)について	4,769

(政策局広報課提供のデータを基に集計)

「EBウイルスと伝染性単核症について」に関連する情報

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kenko-iryo/eiken/kansen-center/shikkan/alphabet/ebv1.html>

「ぎょう虫(蟯虫)症について」に関連する情報

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kenko-iryo/eiken/kansen-center/shikkan/ka/gyou1.html>

「水痘(水疱瘡)・带状疱疹について」に関連する情報

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kenko-iryo/eiken/kansen-center/shikkan/sa/chicken1.html>

2 追加・更新記事

令和4年11月に追加・更新した主な記事は、3件でした(表2)。

表2 令和4年11月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
11月 1日	横浜市衛生研究所における新型コロナウイルスの全ゲノム解析結果	更新
11月14日	2022年度蚊媒介感染症サーベイランス結果	更新
11月28日	横浜市衛生研究所における新型コロナウイルスの全ゲノム解析結果	更新

【 感染症・疫学情報課 】

横浜市感染症発生動向調査報告（令和4年11月）

《今月のトピックス》

- 新型コロナウイルス感染症は第41週以降、増加に転じています。10代を始めとする若い世代を中心に、幅広い年齢層での感染がみられます。
- 梅毒などの性感染症が高い水準で続いています。

◇ 全数把握の対象

＜11月期に報告された全数把握疾患＞

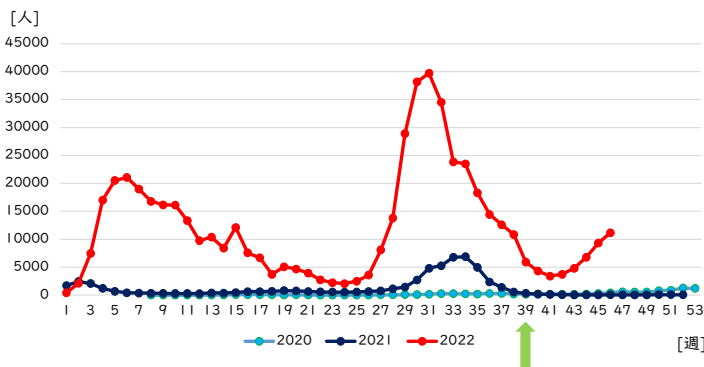
腸管出血性大腸菌感染症	5件	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	3件
E型肝炎	4件	後天性免疫不全症候群(HIV感染症含む)	1件
レジオネラ症	2件	侵襲性肺炎球菌感染症	5件
アメーバ赤痢	1件	水痘(入院例に限る)	1件
カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	8件	梅毒	12件

- 腸管出血性大腸菌感染症**:10歳未満～50歳代で、血清群O157が4件、O26が1件報告されました。経口感染と推定される報告が2件、感染経路等不明の報告が3件ありました。
- E型肝炎**:30歳代～50歳代で、経口感染と推定される報告が2件、感染経路等不明の報告が2件ありました。
- レジオネラ症**:60歳代～90歳代で、いずれも感染経路等不明です。
- アメーバ赤痢**:50歳代で、感染経路等不明です。
- カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症**:10歳未満～80歳代で、感染経路等不明の報告が8件ありました。
- 劇症型溶血性レンサ球菌感染症**:30歳代～90歳代で、血清群はA群、G群、F群が各1件ずつ報告されました。創傷感染と推定される報告が1件、感染経路等不明の報告が2件ありました。
- 後天性免疫不全症候群(HIV感染症を含む)**:40歳代で、無症状病原体保有者、性的接触(同性間)による感染と推定されています。
- 侵襲性肺炎球菌感染症**:10歳未満～90歳代(ワクチン接種歴2回1件、接種歴無1件、接種歴不明3件)の報告が5件ありました。飛沫・飛沫核感染と推定される報告が2件、感染経路等不明の報告が3件ありました。
- 水痘(入院例に限る)**:70歳代(ワクチン接種歴不明)で、感染経路等不明です。
- 梅毒**:20歳代～60歳代で、早期顕症梅毒Ⅰ期7件、早期顕症梅毒Ⅱ期3件、無症状病原体保有者2件の報告がありました。性的接触による感染と推定される報告が11件(異性間10件、詳細不明1件)、感染経路等不明の報告が1件ありました。

◇ 新型コロナウイルス感染症(報道発表ベース)

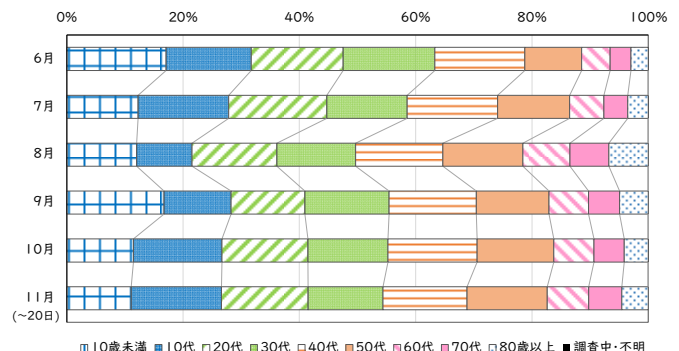
第43週～第46週に横浜市から報道発表がありました症例は32,108件でした。

◆ 横浜市 新型コロナウイルス感染症関連データ <https://data.city.yokohama.lg.jp/covid19/>



1 報告数の推移

※ 2022年9月26日(第39週)より集計方法を変更しています。(緑矢印)

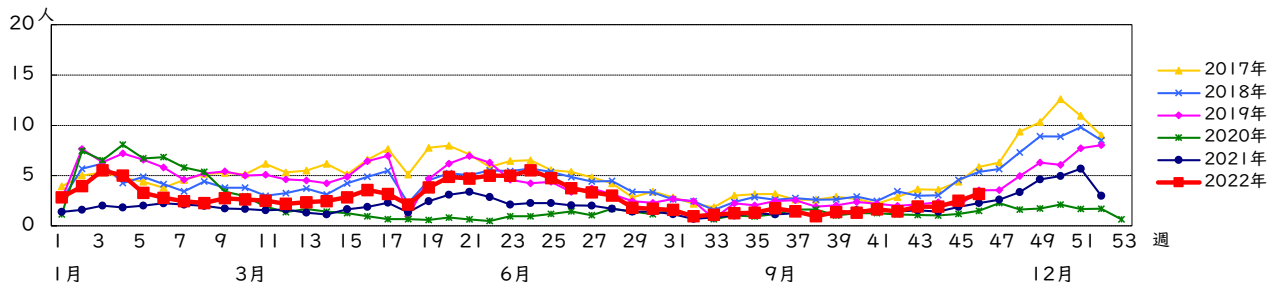


2 年齢層別患者割合

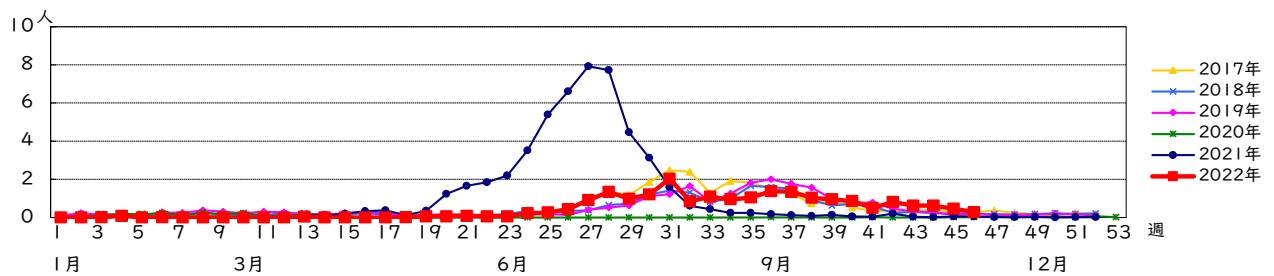
報告週対応表	
第43週	10月24日～10月30日
第44週	10月31日～11月6日
第45週	11月7日～11月13日
第46週	11月14日～11月20日

◇ 定点把握の対象

1 感染性胃腸炎：第39週以降増加に転じ、第43週1.93、第44週1.90、第45週2.49、第46週3.18と増加しています。



2 RSウイルス：第31週に2.03でピークを迎えましたが、第43週0.63、第44週0.62、第45週0.46、第46週0.28と減少しています。



3 性感染症(10月)

性器クラミジア感染症	男性:28件	女性:21件	性器ヘルペスウイルス感染症	男性:5件	女性:8件
尖圭コンジローマ	男性:6件	女性:2件	淋菌感染症	男性:23件	女性:5件

4 基幹定点週報

	第43週	第44週	第45週	第46週
細菌性髄膜炎	0.00	0.00	0.00	0.00
無菌性髄膜炎	0.00	0.33	0.00	0.33
マイコプラズマ肺炎	0.00	0.00	0.00	0.00
クラミジア肺炎(オウム病を除く)	0.00	0.00	0.00	0.00
感染性胃腸炎(ロタウイルスに限る)	0.00	0.00	0.33	0.00

5 基幹定点月報(10月)

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	3件	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	0件
薬剤耐性緑膿菌感染症	0件	-	-

【 感染症・疫学情報課 】

◇ 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:4か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:4か所の計17か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は8か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときのみ行っています。

〈ウイルス検査〉

11月期(2022年第43週～第46週)に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点31件、眼科定点1件、基幹定点3件、でした。

11月21日現在、コクサッキーウイルスA6型遺伝子2件、コクサッキーウイルスA10型遺伝子1件、エンテロウイルスD68型3件、ライノウイルス2件が検出されています。

表 感染症発生動向調査におけるウイルス検査結果(2022年第43週～第46週)

主な臨床症状 分離・検出ウイルス	上 気 道 炎	下 気 道 炎	ヘル パン ギー ナ	低 月 齢 発 熱
コクサッキーウイルスA6型			- 2	
コクサッキーウイルスA10型	- 1			
エンテロウイルスD68型	- 1	- 1		- 1
ライノウイルス	- 1	- 1		
合計	- 3	- 2	- 2	- 1

上段:ウイルス分離数 下段:遺伝子検出数

【 微生物検査研究課 ウイルス担当 】

〈細菌検査〉

11月期(2022年第43週～第46週)の「菌株同定」の検査依頼は、基幹定点からカルバペネム耐性腸内細菌科細菌2件、ウエルシュ菌1件、大腸菌1件でした。非定点からの依頼は、非結核性抗酸菌2件、サルモネラ属菌1件でした。保健所からの依頼は、腸管出血性大腸菌7件、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌5件、劇症型溶血性レンサ球菌2件、侵襲性肺炎球菌2件でした。

「分離同定」の検査依頼は、保健所からレジオネラ属菌2件でした。

「小児サーベイランス」の検査依頼は咽頭炎2件でした。

表 感染症発生動向調査における病原体調査(2022年第43週～第46週)

菌株同定		項目	検体数	血清型等
基幹定点	医療機関	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌	2	<i>Klebsiella pneumoniae</i> (1)、 <i>Klebsiella aerogenes</i> (1)
		ウエルシュ菌	1	<i>Clostridium perfringens</i> (1)
		大腸菌	1	<i>Escherichia coli</i> O6 (1)
非定点		非結核性抗酸菌(NTM)	2	<i>Mycobacterium abscessus</i> subsp. <i>massiliense</i> (1)、 <i>Mycobacterium abscessus</i> subsp. <i>abscessus</i> (1)
		サルモネラ属菌	1	<i>Salmonella</i> Braenderup (1)
保健所		腸管出血性大腸菌	7	O157 : H7 VT2 (3)、O26 : H11 VT2 (1)、O103 : H2 VT1 (1)、O128 : Hg2 VT1 VT2 (1)、Og38 : Hg26 VT1 (1)
		カルバペネム耐性腸内細菌科細菌	5	<i>Klebsiella pneumoniae</i> (3)、 <i>Klebsiella aerogenes</i> (1)、 <i>Morganella morganii</i> (1)
		劇症型溶血性レンサ球菌	2	G群溶血性レンサ球菌 (1)、A群溶血性レンサ球菌 (1)
		侵襲性肺炎球菌	2	<i>Streptococcus pneumoniae</i> 35B (2)
分離同定	材料	項目	検体数	同定、血清型等
保健所	喀痰	レジオネラ属菌	2	<i>Legionella pneumophila</i> SG1 (1)、培養陰性 (1)
小児サーベイランス	材料	臨床症状	検体数	同定、血清型等
小児科定点	咽頭ぬぐい液	咽頭炎	2	A群溶血性レンサ球菌 TUT (1)、A群溶血性レンサ球菌 TB3264 (1)

【 微生物検査研究課 細菌担当 】